

# 第一章 線形代数

## 1) 固有値・固有ベクトル

- ある行列  $A$  に対して、式  $Ax = \lambda x$  が成り立つとき、 $\lambda$  を固有値、 $0$  でないベクトル  $x$  を固有ベクトルという。

問題

$$\begin{bmatrix} 3 & 2 & 0 \\ 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \text{ の固有値、固有ベクトルを求める}$$

回答

$$(A - \lambda I)x = 0, x \neq 0 \text{ より}$$

$$|(A - \lambda I)| = 0$$

$$\begin{vmatrix} 3-\lambda & 2 & 0 \\ 0 & 2-\lambda & 0 \\ 0 & 0 & 1-\lambda \end{vmatrix} = 0$$

$$(3-\lambda)(2-\lambda)(1-\lambda) = 0 \quad \text{よって、} \lambda = 1 \text{ or } 2 \text{ or } 3$$

$\lambda = 1$  のとき、下記を計算して  $x_1 = x_2 = 0$

- $2 \cdot x_1 + 2 \cdot x_2 = 0$
- $1 \cdot x_2 = 0$
- $0 \cdot x_3 = 0$

よって、 $\lambda = 1$  のときの固有ベクトルは、 $t \cdot \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  ( $t$  は 0 以外の定数)

$\lambda = 2$  のとき、下記を計算して  $x_1 = -2x_2, x_3 = 0$

- $1 \cdot x_1 + 2 \cdot x_2 = 0$
- $0 \cdot x_2 = 0$
- $-1 \cdot x_3 = 0$

よって、 $\lambda = 2$  のときの固有ベクトルは、 $t \cdot \begin{pmatrix} -2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  ( $t$  は 0 以外の定数)

$\lambda = 3$  のとき、下記を計算して  $x_2 = x_3 = 0$

- $0 \cdot x_1 + 2 \cdot x_2 = 0$
- $-1 \cdot x_2 = 0$
- $-2 \cdot x_3 = 0$

よって、 $\lambda = 3$ のときの固有ベクトルは、 $t \cdot \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$  ( $t$ は0以外の定数)

## 2) 固有値分解

$\lambda, \boldsymbol{x}$  を行列  $\boldsymbol{A}$  の固有値、固有ベクトルとする。

$\lambda$  を大きさの順で並べ替え、これを対角にする対角ベクトル  $\boldsymbol{\Lambda}$  をつくる。

さらに、対応する  $\boldsymbol{x}$  を同順で列にして行列  $\boldsymbol{V}$  をつくる。

すると、

$$\boldsymbol{A} = \boldsymbol{V} \boldsymbol{\Lambda} \boldsymbol{V}^{-1}$$

となる行列  $\boldsymbol{V}$  を取ることができる。

これを行列  $\boldsymbol{A}$  の固有値分解という。

## 3) 特異値・特異値分解

$\boldsymbol{M}$  の特異値分解は下記のように表される。

$$\boldsymbol{M} = \boldsymbol{U} \boldsymbol{S} \boldsymbol{U}^T$$

# 第二章 確率・統計

## 1) 条件付き確率

ある事象  $B$  という条件のもとで事象  $A$  となる確率

$$P(A|B) = \frac{P(A \cap B)}{P(B)}$$

## 2) ベイズ則

事象  $X = x$  と事象  $Y = y$  に対して、

$$P(X = x|Y = y)P(Y = y) = P(Y = y|X = x)P(X = x)$$

## 3) 期待値・分散

- 期待値  $E(f)$   
 $= \sum_{k=1}^n P(X = x_k) f(X = x_k)$
- 分散  $Var(f)$

$$\begin{aligned}
 &= E((f_{X=x} - E_f)^2) \\
 &= E(f_{(X=x)}^2) - (E(f))^2
 \end{aligned}$$

## 第三章 情報理論

### 1) 自己情報量・シャノンエントロピー

- シャノンエントロピーは、事象 $E$ が起こる確率を $P(E)$ とし、すべての事象 $E \in \Omega$ に対して情報量の期待値のこと

$$H = - \sum_{E \in \Omega} P(E) \log P(E)$$

### 2) KLダイバージェンス・交差エントロピー

- 交差エントロピーは2つの確率分布の間に定義される尺度

$$H(p, q) = -q(x) \ln P(x)$$

- KLダイバージェンスは2つの確率分布の「差異」を計る尺度

$$KL[q(x)||p(x)] = Q(x) \ln \frac{P(x)}{Q(x)} = Q(x) \ln P(x) - Q(x) \ln Q(x)$$